京都工芸繊維大学

氏　　名	りん りん **林　琳**
学位(専攻分野)	博　士（工学）
学位記番号	博甲第 975 号
学位授与の日付	令和 2 年 9 月 24 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
研究科・専攻	工芸科学研究科　建築学専攻
学位論文題目	**中世寺院建築技術論**
審査委員	(主査)教授　清水重敦 教授　満田衛資 准教授　登谷伸宏 准教授　大田省一 文化庁ふるさと文化財の森システム推進事業専門委員会委員　鳴海祥博

論文内容の要旨

本論文は、中世すなわち日本における平安時代末期～室町時代と、中国における同時代すなわち宋代、元代の寺院建築を「架構」の観点に注目して再読し、両者の関係と架構形式ごとの特質を論じるものである。この時期の寺院建築は、中国から日本へ様式が伝播し、新たな技術・様式上の展開が起こり、「和様」「禅宗様」「大仏様」の 3 様式が成立した。歴史的に日中の関係が最も深まった時期の一つであり、日中両国ともに長い研究の蓄積があるが、日中を横断した視点からの研究はまだ十分になされているとは言えない。申請者は日本の遺構を中国建築史の視点から見たとき、技術面において視点が部分に断片化されすぎており、全体の架構原理からアプローチする可能性が残されていることに気付いた。よって、この観点から日本中世の寺院建築を整理し、その特質と中国における源流、伝播過程を検討することとした。

本論は二部構成からなる。第一部は架構類型を論じ、第二部は部分の構造技術の解読を試みている。

第一部は序章、第一章、第二章、第三章からなる。序章では研究の背景、先行研究、目的、方法を論じる。第一章は研究の前提となる中国における架構類型を全体的に整理する。中国では「抬梁式」「穿斗式」「干欄式」の 3 つの架構類型に建築技術が整理されている。本論では前 2 者を主に扱うが、これらに加えて別個の形式を有する重層建築について、本論の視点から整理を行った。

第二章は「穿斗式」の影響を受ける日本の建築について、架構からの分析を行った。平安時代末期に中国から導入された大仏様について、「穿斗式」の影響の観点からそれを全体架構の問題としてとらえ直し、その特徴を貫と挿肘木によって垂直材と横架材の接点を固めて全体の架構を形成する手法とした。また近世建築の内、黄檗宗建築や沖縄の民家など「穿斗式」の架構が認められるものについても取り上げた。

第三章は、日本の和様と禅宗様に見られる「抬梁式」の影響について論じている。特に中国との関係が深い禅宗様を中心的に取り上げた。現存する禅宗様建築について架構を図式化して整理し、ほぼ全ての遺構において、柱または束、台輪、詰組斗栱、鏡天井によって形成される構造体が形成されていることがわかり、この構造体を「蓋」と名付け、日本の禅宗様を特徴として位置づけた。

第二部は、第四章、第五章で中国宋代の建築技術書『営造法式』における部材の解釈を日本の禅宗様等との関係において論じている。第四章は斗栱の中での「挑斡」、「昂桯」について鑁阿寺本堂を引きながら具体的に論じた。第五章では日本の根肘木に当たる丁頭栱について論じている。

第六章では大仏様遺構の代表例である東大寺南大門について、その組立工程を分析する根拠として貫穴の楔代に注目し、その現地調査により新たな点を発見し、分析を試みている。大仏様は全体のダイナミックな架構において知られながらも、技術的には貫と挿肘木という部分の構法にのみ着目されてきたが、その組立工程についてはあまり論じられてこなかった。貫穴楔代の大きさの違いに着目し、その配置を分析したところ、大規模な足場を用いずに組立を行う過程が復元され、部分構法や全体架構だけでなく組立工程を含めてこの建物が設計されるというこれまで認識されてこなかった大仏様の特質が浮かび上がり、「穿斗式」との関係について再考を迫る結論を導いた。

以上の 6 章にわたる論考をまとめ、中世における日中寺院建築の技術の特質を示し、本論文の結論とした。

論文審査の結果の要旨

本論文は、日本中世すなわち平安時代末、鎌倉時代、室町時代と、中国における同時代すなわち宋代、元代における寺院建築の技術について、架構を中心に据えて再検証し、日中の建築技術交流を考察したものである。当該時期の寺院建築は、日中両国ともに研究の草創期より中心的な研究対象となってきたため、膨大な研究成果があり、解かれるべき問題はほとんど解決されているとみられている。申請者は中国における研究状況に通暁しており、その目から日本の研究状況を見直したところ、見逃されている重要な事項があることに気がついた。それが「架構」の観点である。日本では中世寺院建築を様式と部分の構法から捉えることが一般的であり、中国建築との関係もそれらから考察されてきたのだが、中国ではまず全体の構法、すなわち架構から捉えるのが一般的であり、この捉え方の差違ゆえに、両者を同じ土俵において考察する視点が欠けていた。本論文の核心は、この点に気付き、「架構」の視点に立つことで両者を直接比較検討することが可能となることを発見したところにある。

本論文は、研究の目的と方法を述べた序章と、本論全６章、結論からなる。第１章は、研究の前提として中国における木造建築の主要な架構類型について整理した。本論の中心をなす単層建築の「抬梁式」と「穿斗式」についての定義、解釈、研究の現状を整理するのはもちろんのこと、それらの位置付けを明瞭にするために重層建築の架構についても概括的な整理を行った。

第２章は、日本の中世及び近世建築に見られる「穿斗式」の影響について、架構の観点から読解を行った。平安時代末期に中国から導入された大仏様が「穿斗式」の影響を受けるものであることはこれまでにも指摘があったが、そこでの指摘は挿肘木、貫などの部分の構法に関わるものであった。申請者はそれを全体架構の問題としてとらえ直し、大仏様の特徴を貫と挿肘木によって、垂直材と横架材の接点を固めて全体の架構を形成する手法とした。また黄檗宗建築や沖縄の民家など近世の建築の中にも「穿斗式」の架構が認められるものがあり、日本建築の中での「穿斗式」の影響に関する枠組を提示している。

第３章は、日本の中世建築、特に和様と禅宗様に見られる「抬梁式」の影響について論じている。この中で特筆されるのは、禅宗様の架構についての考え方である。現存する禅宗様建築について、架構を図式化して整理することにより、ほぼ全ての遺構において、柱または束、台輪、詰組斗栱、鏡天井によって形成される構造体が形成されていることがわかり、それが中国建築と日本の禅宗様を差別化する最大の点であることが指摘された。申請者はこの構造体を「蓋」と名付け、この蓋の存在が日本の禅宗様を特徴付ける核心であると述べる。

第４章以降は、中国及び日本における中世寺院建築の部分の構法または技術に関する個別論考である。いずれも個別の部位に関わる意義のある発見がなされているが、とりわけ第６章の東大寺南大門の組立工程に関する論考は、貫穴の楔代の配置というこれまで指摘されてこなかった細部に注目し、そこから全体の組立工程を復原するに至った画期的な成果で、大仏様研究に新たな光を当てる論考となっている。

以上、本論文は、既往研究に比して日中の建築に対する捉え方を直接比較し、相互に新しい視点を導入することで、研究蓄積の多い当該分野に新しい展望を開くものである。日中両国の研究状況に通じる申請者ならではの独自性の高い研究として評価できる。

本論文の基礎となった論文は、査読付き論文(1)(2)で、いずれも申請者による単著である。

(1) 「日本禅宗様建築見的《営造法式》中“挑斡”与“昂桯”及其相関構件」『建築史』第 40 号、中国建築工業出版社、2017.12

(2) 「『営造法式』中的丁頭栱及其相関概念辨析」『建築史』第 41 号、中国建築工業出版社、2018.06